

京路地の抽出と空間構成の把握

高岡光太郎・吉川 眞・田中一成

Extraction of Alley Space in Kyoto and Analysis of Its Spatial Structure Kotaro TAKAOKA, Shin YOSHIKAWA and Kazunari TANAKA

Abstract: Kyoto, which is a historic and a tourist city, has various tasteful tangible and intangible tourist attractions such as temples, shrines, traditional townhouses, traditional crafts, the Gion Matsuri (festival) and so on. In recent years, the charm of alley space has been appreciated and the alley space has been recognized as one of the tourist attractions. In this study, the authors tried to extract alleys with a nice atmosphere and to analyze their spatial structures in Kamigyo, Nakagyo, Shimogyo and Higashiyama ward located in downtown Kyoto.

Keywords: 路地空間 (alley space), 町家 (townhouse), 空間構成 (spatial structure), 空間情報技術 (geo-information technology)

1. はじめに

京都の市街地には、碁盤目状の大路小路によって多くの街区が形成されており、この街区のなかには建物の間を縫って人しか通れないような細い道が数多く存在する。それらは、二階屋である町家の一階部分を通り抜けたり、住民の生活空間としての袋小路であったりと、さまざまな様相に驚かされる。このような道は路地と書いて「ろーじ」と呼ばれている。

路地裏といった言葉があるように、路地には隠れ家に通ずるような趣ある空間が形成されている。最近ではこのような趣ある路地が評価され、路地内にある店舗などの紹介（たとえば、らくたび文庫編集部、2008 など）や、観光ルートとして路地を紹介する書籍（鈴木、2011）なども出版されている。京都の路地は、町家や石畳といった地物を含め路地全体を一つの良質な

空間として取り扱われており、そこには、京都ならではの路地を構成する空間、すなわち路地空間が存在する。そこで本研究では、路地に存在する石畳や町家など、京都の路地ならではの空間構成に着目することとした。

2. 研究の目的

京都の路地空間に関する研究として、路地の幅員と建物の法規制に着目し建物の建て替え問題を取り扱った研究（三森ほか、2009）や、ヒアリング調査などから路地の現状や来訪者の路地に対する意識を把握する研究（足立・宮岸、2008）など、法規制や人の心理面に迫る研究が多く、路地空間の構成要素に着目した研究は多くはない。そこで本研究は、京都の路地空間における諸要素に着目し、各要素の関係や空間構成を分析・把握することを目的とした。

3. 路地の定位

空間構成の把握を行うには、まず京都における路地の分布を把握する必要がある。そこで、

高岡：〒535-8585 大阪市旭区大宮 5-16-1

大阪工業大学大学院工学研究科都市デザイン工学専攻

Phone: 06-6954-4109 (内線 3136)

E-mail: takaoka@civil.oit.ac.jp

京都市の中心市街地である上京区、中京区、下京区、東山区の4区を対象に、路地の抽出を行っている。具体的には、路地の実態調査の結果（京都市ほか、2007）をGIS（SIS MapModeller）上に定位している。

3.1 路地調査データ

本研究のベースに、京都市が平成18年度に実施した「京都を中心とした歴史都市の総合魅力向上調査」（京都市ほか、2007）の成果（以下、路地調査データという）を使用した。路地調査データは、紙ベースの白地図上にIDが記された路地の位置図とExcelブック形式で整理された属性データで構成されている。

路地調査データには、路地の景観要素として、町家、伝統産業工房、石畳、歴史性、美観地区（認定、界わい景観整備地区、重要界わい景観整備地区）の5項目が定義されている。ただし、これらは全て有無情報でしかなく、町家の場所やどこまで石畳が敷設されているかなどは把握できない。したがって、路地の空間構成を分析するには、路地空間に各景観要素がどのように存在しているのかを調査しなければならない。

3.2 路地入力支援ツールの構築

紙ベースの白地図をスキャニングし、基盤地図情報をベースに路地をGIS上に定位している。4区に存在する路地の数は3,322本と膨大であり、これらを一本ずつ手作業で定位するには多大な手間がかかる。そこで、路地の定位作業を効率的に行うために、路地入力支援ツールを開発した。本ツールはSIS MapModellerのカスタマイズプログラムであり、基盤地図情報の道路縁をラインで区切るだけで、路地ポリゴンが生成でき、ID入力も含めた一連のデータ入力を可能にするツールである。

3.3 定位結果

開発したツールを用いて4区内にある全ての路地を定位した結果を図-1に示す。区別の路地数は、上京区は840本、中京区は855本、下京区は820本、東山区は807本であった。

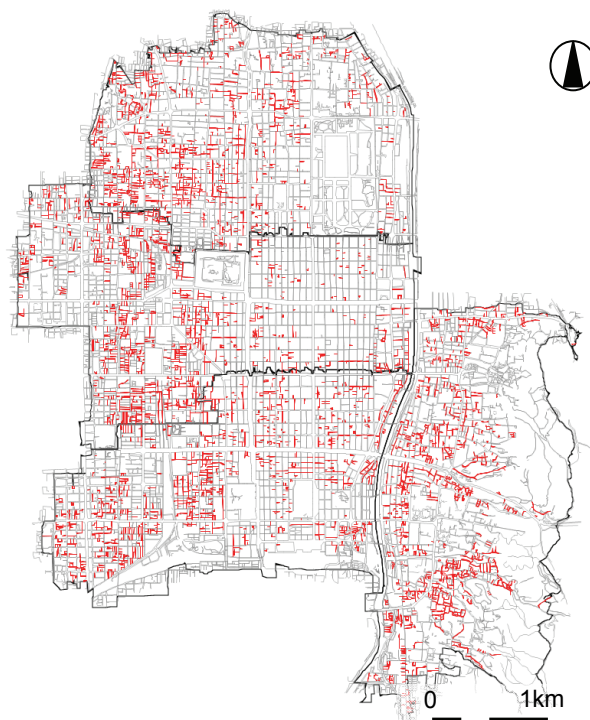


図-1 路地定位結果

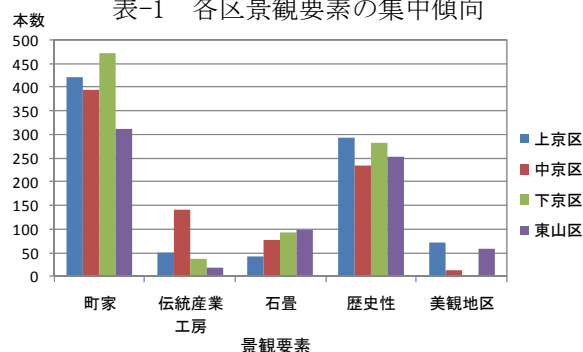
4. 調査地選定

財団法人京都市景観・まちづくりセンターが実施した京町家まちづくり調査（京都市都市計画局、2011）の結果を参考に、京都の路地空間における構成要素の把握を行っている。3.1で触れたように路地が有する景観要素に関する情報は有無情報しかないため、詳細な情報を取得する必要がある。しかしながら、3,322本の路地の全てを調査するのは現実的でないため、調査対象とする路地を絞り込むことにした。

4.1 各区内路地の景観要素の傾向

調査対象路地選定のため、各区内の景観要素の集中傾向を見ることで特徴を把握した（表-1）。

表-1 各区景観要素の集中傾向



4.2 景観要素包含率

元学区別に景観要素を含む路地の分布状況を把握している。元学区とは、京都市に古くから

ある歴史的な地域区分で、住民自治活動などさまざまな場面で使用される。ここで、路地延長が長ければ多くの景観要素を含むと考えられることから、景観要素別路地延長と元学区内の道路延長の割合である景観要素包含率を算出した。本指標を用いて地区ごとの要素による特徴を見る。

4.3 元学区別の路地の傾向

4.1の結果から、上京区は歴史性と美観地区、中京区は伝統産業工房、下京区は町家、東山区は石畳を含む路地を中心に、各区の元学区に対し、路地調査データと寺社仏閣位置図などの地理空間データとを併用して選定を行った。

(1) 上京区

歴史性を示す地物（地蔵・祠、古井戸、歴史的建造物、歴史的な塀、歴史的な看板、など）と美観地区を含む路地で見ると、仁和元学区と翔鸞元学区に多く存在している。また、この他にも町家、伝統産業工房を含む路地を多く有していることがわかった（図-2、表-2）。これは御所、西陣、上七軒といった京都の歴史・文化を象徴するものが多く寄り集まっていることが要因となっている。

表-2 上京区の元学区別路地の景観要素別延長

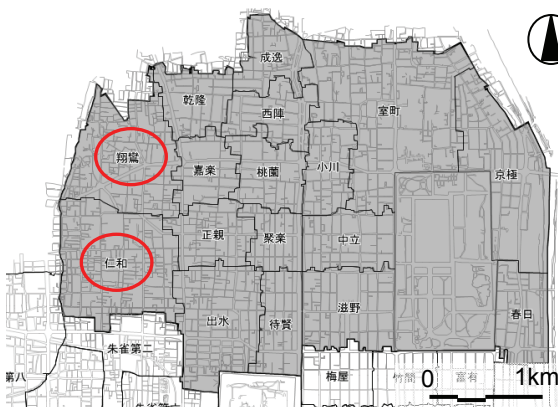
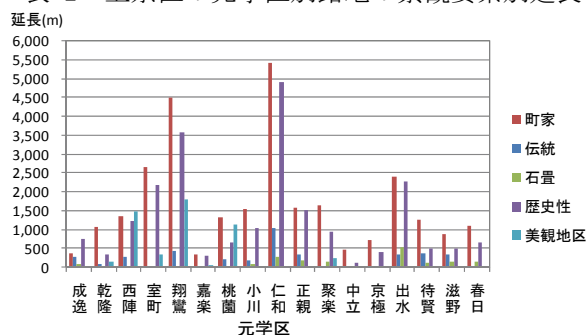


図-2 上京区・仁和元学区の位置図

(2) 中京区

伝統産業工房を含む路地を中心に見ると、朱雀第三元学区に多く存在している。また位置関係上、北側に隣接している朱雀第一元学区には、町家と歴史性を含む路地を多く有しており、朱雀第三元学区との比較対照のために両学区を調査地とした（図-3、表-3）。

表-3 中京区の元学区別路地の景観要素別延長

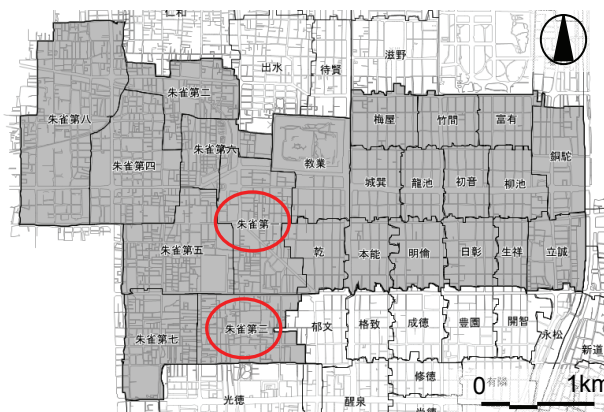
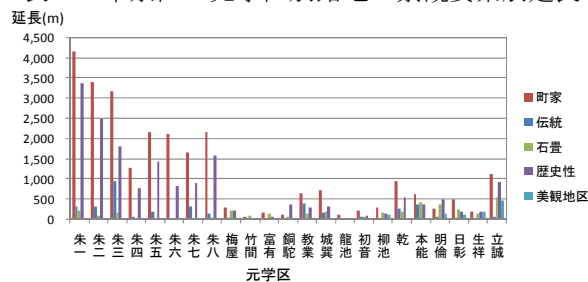
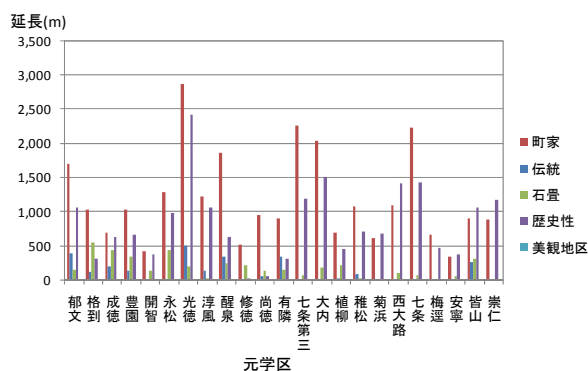


図-3 中京区・朱雀第一および第三元学区の位置図

(3) 下京区

町家を含む路地を中心に見ると、七条第三元学区に最も多く存在している。しかし、景観要素を含む元学区別1本あたりの平均路地延長で見ると、光徳元学区が最も長い。また、伝統産業工房や歴史性を多く有することから、光徳元学区を調査地とした（図-4、表-4）。

表-4 下京区の元学区別路地の景観要素別延長



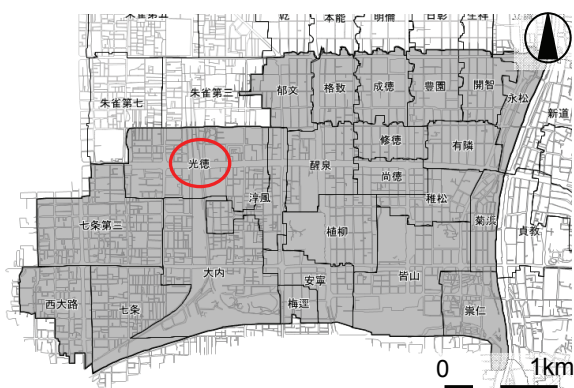


図-4 下京区・光徳元学区の位置図

(4) 東山区

石畳を含む路地を中心に見ると、清水元学区に多く存在している。また、美観地区に指定されている路地の割合も高いことから清水元学区を調査地とした(図-5、表-5)。なお、清水元学区は、石塀小路や産寧坂などの観光名所を有しており、とくに産寧坂周辺は、「産寧坂伝統的建造物群保全地区」に指定されている。

表-5 東山区の元学区別路地の景観要素別延長

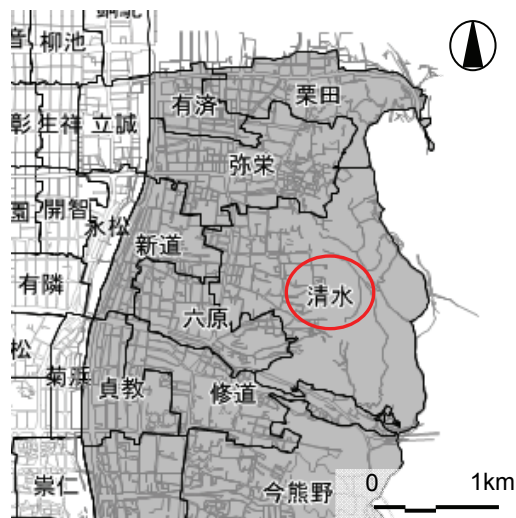
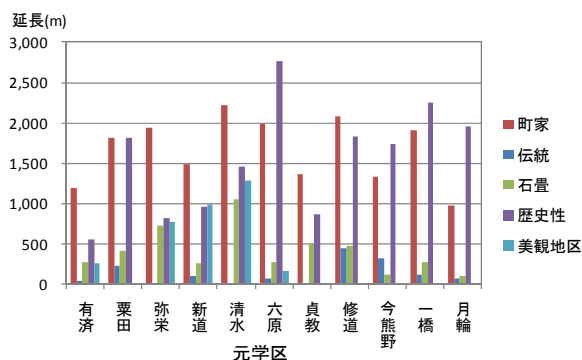


図-5 東山区(一部)・清水元学区の位置図

これらより、各対象地区における景観要素の違いから、詳細に路地空間を調査する元学区を選定することができた。

5. おわりに

京都市の4区において、各景観要素の分布状況と景観要素包含率から地区ごとの特徴を見出し、調査地を選定することができた。今後は、路地空間内の各景観要素が空間的にどのように存在しているか詳細に調査するとともに、その他の景観要素についても確認する。これらより、路地空間における空間構成の把握を行い、京都の路地らしさを感じる空間構成について迫りたいと考えている。

参考文献

- 足立真深・宮岸幸正(2008):京都市中心部における路地空間に関する研究—中京区「田の字」地区を対象として—,平成19年度日本建築学会近畿支部研究報告集,569-572.
- 京都市・大津市・宇治市三都市協議会(2007):「京都を中心とした歴史都市の総合的魅力量向上調査に係る歴史都市の美しい細街路の維持・保全のための調査研究報告書」,国土交通省住宅局.
- 京都市都市計画局(2011):「平成20・21年度京町家まちづくり調査記録集」,京都市・財団法人京都市景観・まちづくりセンター・立命館大学.
- 鈴木昌子(2011):「京都お散歩地図」,学研パブリッシング.
- 三森 弘・貝島桃代・一ノ瀬彩・土岐文乃(2009):路地における建物の断面形状と位置関係による空間類型 連担建築物設計制度による路地空間の維持・更新に関する研究(2),平成21年度日本建築学会近畿支部研究報告集,743-744.
- らくたび文庫編集部(2008):「京の路地裏案内」,コトコト.